総合政策学部
OFFICE

伊賀上菜穂 教授

「信じさせたいこと」と実態は、時に異なる。真実は、市井の人々の暮らしの中にも潜んでいる。

「東日本大震災の際、ロシアからも救援隊が派遣されたのですが、あまりニュースにならない。ロシアについてはポジティブな情報が広がらないのです」と伊賀上先生は残念がる。海をはさんだ隣国とも言えるロシアだが、そこで暮らす人々の実像は、日本では意外なほど知られていない。それにはさまざまな経緯がある。伊賀上先生の話からは、「自分で確かめ、考える」ことの大切さが伝わってくる。

時代の胎動を感じ、ロシア研究へ。「市井の人々」に関心を抱き、研究領域を広げていく。

中学生の頃から、教科書で紹介されていたロシア文学や音楽の時間に習ったロシア民謡に親しみを感じていたという伊賀上先生。特にロシア民謡の、憂いのあるメロディに惹かれていたそうだ。

伊賀上先生が高校生の時、ソヴィエト社会主義共和国連邦（ソ連）で「ペレストロイカ」が始まった。これはソ連共産党書記長に就任したミハイル・ゴルバチョフが推進した改革政策で、情報公開も進められた。そして、それまで西側諸国（資本主義陣営）に伝わることが少なかったソ連の内側が少しずつ見えてきた。

伊賀上先生は興味を抱いていたロシア・ソ連が大きく揺れ動いていることを感じ、この地域について学ぼうと決意。大学の外国語学部に進学しロシア語を専攻する中で、ロシア・ソ連の一般の人々の生活に関心を持つようになり、ロシア文化からロシア・ソ連を構成する民族、口頭伝承、歴史へと研究領域を広げていった。

ここ100年ほどの間に2度も大きな体制転換を経験していることがロシアの文化と人々の暮らしに大きく影響している、と伊賀上先生は語る。「1度目は1917年のロシア革命により帝政時代が終焉を迎えたこと。革命以前の帝政時代は皇帝による専政が行われ、皇族と貴族を中心に政治が行われていました。貧富の差は大きく、知識人にとっては『こうした社会環境の中で、いかに民衆を救済するか』ということが使命の一つとされるほどでした。革命後にソ連が樹立されると、レーニンやスターリン主導のもとで社会主義国家として歩み始めます。この時代は身分制社会から平等社会へと理念が切り替えられ、国家政策がすべてにおいて優先されました。そして2度目は第二次世界大戦から40年近くを経た1980年代後半、ペレストロイカの結果によりソ連が崩壊したこと。ポスト社会主義の時代が始まると資本主義が台頭し、再び貧富の差が拡大していきました」

ソ連時代は、モスクワなどの大都市でも人々がどのような考えを持っていかなる暮らしを営んでいるかが、外部にはほとんどわからなかった。「一般の人々の考え方や生活文化は、上流社会の文化や国家の政治ほ

ど重視されない傾向があります。しかし、普通の人々の暮らしの中にこそ、さまざまな真実が潜んでいるのです。フィールドワークを重視する研究からは、モスクワと農村などロシア各地の地域差や、時代における違いなどが浮かび上がってきます。政府のプロパガンダや経済分析とは異なる実状が見えてくるのです」

誰かが「信じさせようとすること」ではなく、自らの観察力や分析力で真実を見出していく。そこに研究の面白さがあるのだと、伊賀上先生は語る。

旧「満洲」に暮らしていた農村ロシア人の実態と、その後を追究。

ロシアの人々の暮らしに関心を抱き、研究を深めていった伊賀上先生は、やがて多くのロシア民謡で生活風景が描かれていた「農民（農村ロシア人）」の存在に注目するようになる。

「帝政時代の農村に関する史料は多く研究も進んでいたのですが、ソ連時代に入ると状況が一変し、農村の暮らしがどのような状態なのか外部からはよくわかりませんでした。政府の統制下で農村は厚いベールに包まれ、外国の研究者が訪問することもほとんど許されていませんでした。ソ連崩壊後の今ならば、ソ連時代に農村の暮らしがどのように営まれていたのか、また体制転換の影響をどのように受けているのかが解明できるのではないかと思ったのです」

現在、先生が特に力を入れているのが「旧『満洲』農村ロシア人の社会」に関する研究だ。ロシア東方のシベリア地域について研究した際、先生は「古儀式派」というロシア正教の一派に属する人々と出会った。古儀式派とは17世紀にロシア正教会で実施された典礼改革を拒んで政府から弾圧を受けたグループで、強い信仰心と勤勉さで知られていた。先生はシベリア農村に住む古儀式派教徒について研究を始め、そのつながりで、シベリア・ロシア極東から旧満洲へ移住した古儀式派農民についても追究することになった。

このテーマでは、現代史におけるロシアと日本の関わりを見ることもできる、と伊賀上先生は言う。「ロシア革命の結果、多くの人がソ連政権を受け入れず難民や亡命者として他国に流出しました。こうした人々は『白系ロシア人』と呼ばれています。ソ連と国境を接する中国東北部に

伊賀上 菜穂（いがうえ なほ） 上智大学外国語学部ロシア語学科卒業。大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程修了。大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。東北大学東北アジア研究センター講師（研究機関研究員）、大阪大学大学院言語文化研究科助手、同大学および大阪外国語大学非常勤講師、中央大学総合政策学部准教授を経て現職。専門は文化人類学（民族学）、ロシア史。

伊賀上先生の共著。ロシア語で著された書籍もある。

アラスカに暮らす古儀式派教徒を訪ねた、フィールドワークの1シーン。

は、特に多くの白系ロシア人が流入しました。一方、この時期日本は東北アジアへの侵攻を進め、1932年に『満洲国』を建国し、多くの開拓民を送り込みました。満洲は、ロシア人と日本人が密接に接触する地域となっていたのです」

白系ロシア人はハルビンなどの都市ばかりではなく、農村にも住んでいた。彼らはハルビンの東方に位置するロマノフカ村（現・黒龍江省）などに入植し、寒冷地にたくましく適応して農業を営んでいた。このロマノフカ村に住んでいた農民が、ロシア極東地方から弾圧を逃れてやってきた古儀式派の人たちであった。

当時の日本政府は満蒙開拓政策のもと満洲に送り込んだ日本人開拓者に向けて、現地への適応を実現するための生活モデルを提示する必要があった。そこで、ロマノフカ村など、適応を果たしたロシア人農村が脚光を浴びる。南満洲鉄道株式会社（満鉄）などにより多くの調査が行われたほか、映画が撮影され、『婦人画報』といった雑誌に記事が掲載されたりもして、ロシア人農村の姿は満洲国を始め日本本土でも広く紹介された。

「満洲国は日本の傀儡国家でしたから、そこに暮らすロシア人は農民を含めて日本の統制を受けており、兵役や労働義務を課されて兵力増強に利用されました。日本史上まれにみる、日本人によるヨーロッパ系民族の支配が行われていたのです。日本が敗戦し満洲国が崩壊すると、白系ロシア人の一部は『日本に協力した』罪を問われて逮捕されたりソ連に強制連行されたりしました。残りの人々も中国情勢の変化の中で、ソ連への帰国や北米や南米、オーストラリアなどへの再移住を余儀なくされました」

日本人によるロシア人支配という、かつて多くの日本人が知っていた事実も、65年の時を経た今、知る人は少なくなった。満蒙開拓政策にまつわる事柄のため、日本にとっては「忘れたい事実」だったのではないかと伊賀上先生は推測している。時代背景により人が関心を「持たされる」ことは変わる、ロマノフカ村の古儀式派農民の研究を通じ、伊賀上先生は改めてそれを痛感したという。

「他国へ再移住した古儀式派農民のその後は比較的知られているのですが、ソ連へ帰還した人々については長い間不明でした。しかし、ペレストロイカ以降状況が変化し、ソ連に帰った人々の一部が、現在、ロシア極東のハバロフスク地方に住んでいることが明らかになりました。私は2005年の夏、ハバロフスク地方に住む旧ロマノフカ村の住民を訪ね、彼らが戦後体験した壮絶な苦悩を聞き取りました」

先生は、アラスカに移住した旧ロマノフカ村の古儀式派農民も訪ねた。世界各地に散った古儀式派農民の「その後」を追う中で、伊賀上先生は古儀式派の人々の生活がこれからどうなっていくのかについて注目するとともに、「移民」という新たなテーマにも関心を抱くようになったという。今後はこれらのテーマをさらに追究していきたい、と伊賀上先生は意欲を語った。

日本ではその実像が知られていないロシア。多くの人に魅力を知ってほしい。

伊賀上先生のゼミのテーマは「ロシア・旧ソ連地域の社会と文化」。そのユニークな点は、研究と同時に「ロシア語を学ぶ」ことだ。ロシアについて深く理解するためには、ロシアの人々が使っている言語を習得することが大切だと伊賀上先生は考

ゼミの参加者と伊賀上先生。先生の人柄を感じさせる、和やかな様子が印象的。

えている。

「ロシア語の文字の中には見慣れないものもありますが、アルファベットとして皆さんがなじんでいるラテン文字と共通するものが多いので、すぐにマスターできると思います。また、ロシア語はヨーロッパの多くの言語に通じる部分が多いので、特にドイツ語を学んだ人にはなじみやすいかもしれません。『ロシア語は難しい』と習得に挫折する人の多くが始めの段階で壁にぶつかるようですが、初級で習う文法以上に難しい要素はそれほどないので、初級さえしっかり習得すれば、その後はあまり苦労しないと思いますよ」

ロシア・旧ソ連地域の範囲は広いため、伊賀上先生は東欧や中国などについても知識があり、指導することができるそうだ。ゼミに参加する学生も、文化や歴史などについて関心のある者が多数を占めるとのこと。「企業への就職を考えている学生であれば、商社など、ある国や地域を理解する力が必要になる業種を志望する人にとって、私の専門分野が役に立つでしょう」と伊賀上先生は言う。

「学生にロシアのイメージを訊ねると、『広い・怖い・寒い』（笑）。日本でロシアの実像はあまり知られておらず、印象が偏っていると感じます。ロシア・旧ソ連地域は多彩な表情を持っていて、文化にしろ政治にしろ自分にとって興味深い側面が必ず見つかるエリアですから、学べば学ぶほど発見があると思います。ぜひ、多くの学生にこの地域の魅力を知ってほしいですね」

高校生の皆さんへ

私が研究対象としているロシア（旧ソ連圏）、また専門分野としている文化人類学や民族学は、アメリカ中心の国家・経済政策論など、現代社会においてメジャーとされている分野から一定の距離をとる学問です。しかしそれゆえに、それら「世界に対して大きな影響力を持つもの」がこの世のすべてではない、ということがよく見えます。真実に近づくためには、メジャーとされる分野以外にも広大な領域が存在すること、そしてマクロな視点とミクロな視点の双方が必要であることを念頭に置く必要があるのです。

これから大学で高度な知識を得ようとしている皆さんには、世の中にあふれている「現代社会で権威を持つ」考え方を鵜呑みにせずに、まずは少し斜めの角度から見て、現実はどうであるかを自分で見極められる力を付けてほしいと願っています。

４年生の卒業論文を指導。悩んでいるポイントについても
適切なアドバイスが受けられる。